

# 私の視点

投稿は〒104・8011(住所不要)朝日新聞  
オピニオン面「私の視点」係かsiten@asahi  
.comへ。電子メディアにも収録します。

日本国際ボランティアセンター  
スーダン現地代表

いまい 高樹  
たかき



7月に独立した南スーダンで国連平和維持活動(PKO)が始まり、日本からの自衛隊派遣が検討されている。海外派遣そのものは是非はさておき、スーダンに4年間駐在し人道支援活動に携わってきた者として意見を述べたい。

まず、国連安保理が決定した南スーダンPKOの意味を考えてみたい。このPKOの前身は2005年の南北内戦終結後、和平合意に基づいて派遣された国連スーダン派遣団(UNMIS)だ。6年間の和平プロセスを経て今年7月に南部スーダンは分離独立しUNMISの活動も終了した。

しかし、和平プロセスの中で期待された南北の和解は進展せず、境界線付近の油田から得られる収入の分配方法も決まっていない。双方が領有権を主張するアビエイ地区には、今年5月に北部軍が侵入。6月には境界線の北側に接する地区で、北部軍は南部系勢力への掃討作戦を実施、数十万人と言われる避難民を出して戦闘は現在も続いている。この地区で私たちが支援していた村は空爆を受け、活動は休止を余儀なくされた。

国連は当初PKOについて、紛争の火種がある境界線の北側にも派遣して地域の安定を図ることを模索した。しかし「国連は南部の勢力と結託している」と北部政府はこれに反発しPKO部隊の撤収

## 自衛隊派遣より南北仲介を

### 南スーダンPKO

を要求。つまり、北部から追い出され「仕方なく」南部だけで実施するのが今回のPKOなのだ。

紛争抑止や停戦監視の観点からすれば当然、当事者である南北両政府の合意のもと境界線の両側へのPKO派遣が望ましい。南部への単独派遣は、北部政府から見れば南部に対する国連の「肩入れ」であり敵視の対象ともなり得る。そのようなPKOが紛争を中立的な立場で抑止することは困難だ。

それは国連にとってはやむを得ない選択肢かも知れない。しかし、そこに自衛隊を派遣することが日本の果たすべき役割かと言えば、決してそうではない。日本はこれまでスーダンに対し、南北のバランスを重視した支援を行ってきた。その結果、欧米諸国への警戒心強い北部政府内でも日本に対する感情は極めて良い。南スーダンへの自衛隊派遣は、誤ったメッセージを送ることになる。南北双方と良好な関係を持つ日本はその強みを生かし、他国とも協力しながら緊張緩和に向けた南北対話の仲介者の役割を演じることが、よりふさわしい支援ではないか。

むしろ、南スーダンの国造りへの支援は必要だ。これまでも政府の途上国援助やNGOの活動を通じて、教育や医療など様々な分野で日本は支援を実施してきたし、今後も多くの貢献ができる。